

## 血管病発症のシグナル伝達と新たな治療戦略

西田 基宏

Signal Transduction in the Development of Vascular Disease and  
New Therapeutic Strategy

Motohiro NISHIDA

*Department of Pharmacology and Toxicology, Graduate School of Pharmaceutical Sciences,  
Kyushu University, 3-1-1 Maidashi, Higashi-ku, Fukuoka 812-8582, Japan*

脳卒中や心筋梗塞、腎硬化症など重要臓器の血行障害による疾病（すなわち血管病）はわが国で非常に多く、これらを足し合わせると死因の第一位となる。血管病は、血管系の機能を制御する細胞内情報伝達機構の破綻によって引き起こされる。血管の収縮弛緩機能は、血管平滑筋細胞、内皮細胞、血管周囲神経細胞によって調節されており、血液の粘度は血球細胞によって調節されている。血管の機能はこれら複数の細胞によって精巧に調節されている。ホルモンの過度な分泌や物理的刺激などによって各細胞のバランス調節が破綻すると、内皮機能障害、血管新生、異常収縮、血管構造改変（リモデリング）などが引き起こされる。これが血管病発症の引き金になっている。すなわち、血管病の病態生理を理解するためには、血管機能調節に係わる各細胞の生理機能を理解することが重要であると考えられる。3月のシンポジウムでは、図に示す6名の研究者にそれぞれの観点から血管機能調節に関する新しい知見を紹介して頂いた。ここでは具体的な内容について

は割愛させて頂くが、それぞれの細胞における生理機能の解明だけでなく、創薬という観点からも非常に興味深いシグナル分子が同定されたことを実感できる内容であった。御参加頂けなかった方々にもぜひ広く知って頂きたいと思い、このたび特集を企画した次第である。御多忙な中、誌上シンポジウムに御理解・御協力下さった先生方には、この場を借りて深く感謝の意を表したい。

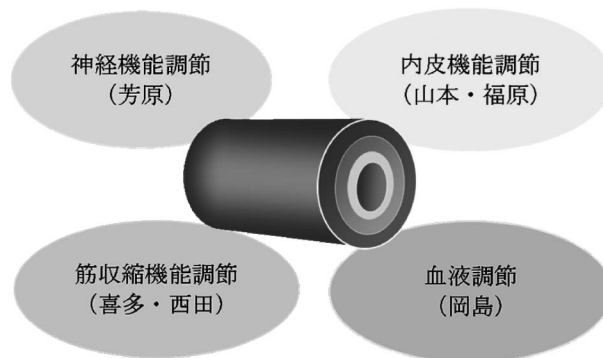


図 血管機能調節とシンポジウムの構成